東北芸術工科大学 紀要

BULLETIN OF
TOHOKU UNIVERSITY
OF ART AND DESIGN

第31号 2024年3月

外部機関と協働した授業実施についての報告
―山形県立山形盲学校での協働授業について―

Report on Class ManagementCollaborated with an Outside Organization
－About Collaborative Classes at Yamagata Prefectural Yamagata School for the Blind－

石沢 恵理｜ISHIZAWA Eri

【作品・制作ノート】

外部機関と協働した授業実施についての報告
―山形県立山形盲学校での協働授業について―

Report on Class ManagementCollaborated with an Outside Organization
―About Collaborative Classes at Yamagata Prefectural Yamagata School for the Blind―

石沢 恵理｜ISHIZAWA Eri

Because a student of this school plays an active part in various fields after the graduation, power keeping art alive in society is necessary.
To this end, I believe it is necessary for students to experience self-transformation through encounters with various people and environments, and to think about how art can facilitate communication between people.
The purpose of this paper is to describe what students have learned through joint projects with external institutions. The program was designed so that students could sufficiently prepare.
Through practice, students changed their way of thinking about "disability." It also provided an opportunity for students to feel their own growth.

Keywords:
ワークショップ、教育プログラム、障がいのある人のアート、視覚障がい、協働事業
workshop, educational program, art for people with disabilities, sight disability, collaboration business

1.はじめに

(1)本稿の目的

本学でアートやデザインを学んだ学生が、卒業後にさまざまな分野で活躍していくために、アートではない現場でアートを生かしていく実践力が必要だ。そうした実践力を身につけるためには、さまざまな人々や環境との出会いを通して自己の変容を感じること、そして、アートを介した人との関わりを通してその意義について考える機会が必要になると仮定する。

筆者が所属する美術科 総合美術コースでは、「アートの力を社会に生かす」をコースビジョンとしている。

アートには、視覚的、触覚的に物事を共有することを通して、人と人とのコミュニケーションを生み出し、円滑にする力があると考え、美術技法や造形素材を活用したアートワークショップを実践的に学ぶことができるコースだ。

アートワークショップを開発、実践していくためには、実施する人、受ける人といった二項関係を超えて、主催者も参加者もお互いが共に学び合う関係性を目指すことが重要だと考える。この考え方を学生が身につけるためには、自身の表現を発信するだけではなく活動を通して得た気づきから自身を変化させていく経験が重要になるのではないだろうか。他者との出会いは、その人の視点をかりて社会をとらえる機会となり、自身のもののとらえ方を変化させるきっかけとなる。また、アートワークショップを考案していく際には多角的に内容を検証することにつながる。こうした経験を経て、アートを介したコミュニケーションについて学生自身が自分なりの意義を見出すことが必要になる。

今回、「やまがたアートサポートセンターら・ら・ら」(以下

「ら･ら･ら」と表記）と山形県立山形盲学校（以下、「山形盲学校」と表記）と協働し、障がい者福祉の現場で多様な分野からの人材育成を行うことを目的としたモデル事業を実施した。本稿では、具体的な実践内容と、学生が子どもたちと出会い、どのような気づきを得たのか考察することを目的とする。

（2）「やまがたアートサポートセンターら･ら･ら」と山形県立山形盲学校について

「やまがたアートサポートセンター ら･ら･ら」は社会福祉法人「愛泉会」が、山形県の補助事業で運営しているセンターで、2016年から『やまがた障がい者芸術活動推進センター』としてスタートし、2020年からは障害者芸術文化普及支援事業(厚生労働省)として、障がいのある方の芸術文化活動のさらなる充実のため、相談事業、人材育成、関係者のネットーワークづくり、発表等の機会の創出、情報収集･発信の5つの事業を実施している。また、山形県立山形盲学校は、山形県内で唯一視覚障がい教育を行う特別支援学校だ。学校には、幼小学部、中学部、高学部があり、一人ひとり視覚の状態に合わせた教育が行われている。

今回の事業は、「ら･ら･ら」の人材育成事業『地域に出かけ一緒にやってみる』として実施する。福祉を専門に学んだ人のみならず、アーテイストやデザイナー等の外部の人材と協働を深め、福祉と芸術文化の分野が互いの事を理解し、学ぶ機会を作り、県内各地で実践するファシリテータを増やしていくことを目的としている。事業の背景には、障がいのある、ないに関わらず共に社会を創出していこうとする共生社会に対する想いがある。共生社会の創出は、全ての人々にとって重要な社会のあり方を示している。そのためにも、多くの人に障がいについて身近に感じてもらうことが一層必要になるが、障がいについて「わからない」と感じていることが多いのではないだろうか。今回のように学生が視覚障がいを持つ子どもたちと出会うことを通して、1人の人として出会い関わりあい、相手を知ることにつながってほしいと考える。

2.共同事業「ゆめの国をつくろう」

（1）概要

実施の際には、学生に身につけてほしい目標を具体的に設けた。①視覚障がいを持つ子どもたちに向けた内容を構築すること、②子どもたちとの関わりを通して子どもたちを理解すること、③ファシリテートの力を身に着けること、この3点を学生にも伝え、活動をスタートした。この目標を達成するために、視覚障がいや障がいそのものについて考えていることを語り合う「考える時間」、盲学校に赴く「出会う時間」、試作して活動内容を考える「つくる時間」、実践を行う「実践の時間」、そして最後の「振り返りの時間」と段階的に活動を設けて準備していった。それぞれの時間の後にも、学生が気づきや考えたことを共有できる時間を設けることにした。なお、今回、活動に参加した学生は総合美術コース1、2、3年生（2023年3月）6名だ。実施日と内容は、表1）の通りである。

表1:実施日と実施内容

タイトル	日にち	活動内容
考える時間	2023/2/14	･顔合わせ ･本を読んでの意見交換
出会う時間	〃	･山形盲学校への授業参観と振り返り
つくる時間	2023/2/21	･授業内容を考える ･試作･サンプル作り
実践の時間	2023/3/2	･共同授業本番
振り返りの時間	〃	･全体での振り返り ･formsでの個別の振り返り

（2）考える時間

活動初日であるこの日は、午前と午後に分かれて活動を実施した。午前は、有志で集まったメンバーの自己紹介とアイスブレイクを行い、緊張をほぐしてから、これから出会う子どもたちのことを想像するために「目が見えない人は世界をどう見ているのか」伊藤亜紗（著）（P29～43）の序章を読んで、気になったことや考えたことを出し合った。学生からは以下のような意見が出された。

･視覚に障がいがある人たちと関わるために、どうしたら「失礼じゃないか」と考えていた。それは、見えることが普通であると考えていたところがあったのだと感じた。

･見えない人は、自分にはない世界を感じていて、その違いの面白さを見つけたい。

･『環世界』の話から、一人ひとりの世界のとらえかたが異なることがわかった。ワークショップの際にも、同じ素材でも一人ひとり使いかたが違っていたり、イメージが異なることからアンテナの立て方が違うことがわかる。

また、「小学生の頃に、視覚障がいのある友人がいて、その子と友達で手紙のやり取りをしたいから点字を習い始めた。その子はピアノが得意で、私はピアノができなかった。得意なこと、不得意なことがあるのはどんな人も普通のことで、何も変わらないと感じていた。」と具体的なエピソードを語る学生もいた。最後に、実践が初めての学生に対して、実践経験がある2、3年生から、子どもたちと関わる際に気をつけると良い点を紹介してもらった。書籍から感じたことや具体的な学生の経験など、さまざまな角度から情報を取り入れながら、子どもたちに向けて思いを巡らす時間を持つことは、プロジェクトに丁寧に関わる姿勢を作るために重要な時間だと考える。

(3)出会う時間

午後からは「ら・ら・ら」のコーディネーターのTさんも同行し、山形盲学校で図工の時間の授業を参観する機会をいただいた。対象は、3年生2名、4年生1名、5年生1名で、全盲の児童もいれば、光を感じる児童もいて、視覚の状態には個人差があると事前にS先生から教えていただいた。

授業題材は「音楽の世界を絵で表そう」というタイトルで、特定の音楽を聴いて画用紙に自由に表現するという授業だ。今回が2時間目となる。見学する学生たちは緊張した面持ちだったが、教室に入ってきた子どもたちの明るさに圧倒されていた。授業では絵の具を使う児童、紙を切りはりする児童、一人ひとりの制作内容に合わせて授業が進んでいった。授業には2名の教員が、MT(メインティーチャー)ST(サブティーチャー)とそれぞれの役割を持ちながら子どもたちの制作のサポートし、指導を行なっていた。支援の方法としては、基本的には児童自身が支援を必要だと感じた際に、教員にサポートをお願いする様子が見られた。そのことから、教員が子どもたちの判断を尊重していることが伝わってくる。教員も子どもたちの表現に対して「いいね〜」と感想を述べたり、一緒に考えたりと授業を楽しみながら進めていた。

今回、参加学生の人数が多かったため2名の学生も同じ題材に取り組んだ。授業の片付けが早く終わった児童には、学生の作品を鑑賞してもらった。手で触れて「これはダンボールですか?三角の形の折り紙が‥」と素材と形を確かめながらじっくり鑑賞していた。「なぜこうしたのですか?」と学生に質問する様子も見られた。最後に、児童一人ひとりが作品タイトルと工夫したところ、頑張ったところを堂々と発表してこの時間で制作を終了した。

大学に戻り、今回の授業参観での気づきを振り返った。学生の感想として以下のようなものが上がった。

・子どもたちは変わらない。(障がいのある、ないに関わらず)素材を見立てたり、イメージを膨らませて制作を楽しんでいた。見えないからこその想像力がある。
・初めてのことでとても緊張したが、子どもたちが明るくて元気だった。
・「音楽を聴いて」という題材だったので自分は木琴の音に着目したが歌詞に着目している子が多かった。また、鑑賞の時間では形や素材についての質問をもらい鑑賞を楽しんでいることも伝わった。
・材料の裏面に事前にテープをはったりと素材の工夫をされたり、片付けで混在しないように声がけをしたりと先生方の関わりから学ぶことが多かった。

振り返りでは、学生たちが子どもたちとの出会いにより強烈なインパクトを受けたという意見が多数出た。午前中まで、抽象的なイメージだった視覚障がい者が、具体的な1人の人間として感じ取れたことが大きいのだろう。具体的な制作の様子を見たことで、「制作を楽しむことは他の子どもたちと変わらない。」との気づきや、鑑賞の時間での作品を通したやり取りの中で、言葉で作品を味わう新たな体験を学ぶ機会となった。また、材料の準備の方法、教員、支援員がどのように児童に声がけしているのかを学ぶことができたようだった。

残りの時間ではこの気づきをもとに、授業の内容について考えることになった。振り返りに参加していた「ら・ら・ら」のコーディネータのTさんから、「福祉と芸術の分野をつなぎ事業を実践する『ファシリテーター』を育成することが今回の事業目的でもある。そのため、子どもたちと対話しながら制作ができる内容が良いのではないか。」という提案があった。また、山形盲学校のS先生から「子どもたちは、自分の家や空間を作ることが好きで、図工の時間に実施したことがある。」と伺っていたため、『自分の好きな場所』や『行ってみたい場所』などを学生と対話しながら、さまざまな素材を組み合わせて制作する内容になり、次回から試作を行うことになった。

(4)つくる時間

前回の振り返りをふまえて、素材選びと試作を行った。素材は筆者が購入したものや大学アトリエにある素材を使用した。

①　土台を制作し、触覚で素材を選ぶ

さまざまな素材を貼り付けるための土台を、段ボール、発泡スチロール、スチレンボードの3種類で制作した。大きさや形、表面にどのような凹凸や質感があると良いかを考えながら土台のサンプルを制作した。学生たちは何度も手で触れながら、端をギザギザにカットしたり、中心付近をくりぬいたりと土台の形を工夫していた。子どもたちと学生が一緒にやり取りしながら制作できるように約90cm×60cmと面積を持たせた。

また、前回の授業参観で、子どもたちが手で様々な素材に触れてそこで感じたことを話す様子が見られたことから、改めて触れることの重要性を考えた。子どもたちが普段感じている感覚を体験するために、学生にアイマスクをした状態でアトリエ内にある素材に自由に触れてもらった。2人1組になり、1人がアイマスクをした学生を誘導し、素材に手を伸ばしてもらう。視覚を遮断し、触覚を大切にすることで、普段触れている素材でも感じ方が変化する。普段、いかに視覚に頼っているかがわかる体験だ。

写真1:1人が誘導して素材に触れさせる。

また、先ほど制作した土台もアイマスクをした状態で触れてもらった。サンプルの土台は、中央に穴を開けたり、山のように突起物をつけるなどの工夫があったが、アイマスクをして触れると「障害物があると広い面積を感じられない。」、「世界がそこで終わっている感じがする。」といった意見が生まれた。逆に、スチレンボードにペンチを突き刺して表面をザラザラにした質感は、「ツルツルの部分と差があって面白い」といった意見が出た。

写真2:厚みを感じるように発泡スチロールの土台は端の形を工夫。

写真3:スチレンボードの表面にシャープペンで細かい凹凸をつけた。細かい連続した刺激がある。

②　サンプル制作

触覚で楽しむことを基準にして、素材と土台を選び、本番の流れを意識したサンプル制作を行った。まず、土台に触れて、その特徴からどんな場所なのか、どんな場所を作りたいのかをペアごとに話し合ってもらった。土台の形や質感に影響されて「リゾート地」や「砂漠」などイメージが生まれたことから、ペアごとに制作がスタートした。最後に鑑賞の時間をとり、ペアごとにどんな作品を制作したのか発表してもらい、作品に触れて味わう時間とした。

③　試作の振り返り

試作を終えて、素材の違いごとに土台のメリット・デメリットを出し合った。さらに、土台の形・質感を受けて、ペア同士で話し合うことが作品制作の基盤になることが共有された。そのため、土台を選び、どんな場所なのか、そこに何を作りたいかを考える時間を充実させることとした。土台を選ぶことの面白さから、土台のことを『土地』と呼ぶこととし、授業のタイトルも『ゆめの国をつくろう』で決定した。

写真4:目を閉じて他のグループの作品に触れて鑑賞する。

このように、子どもたちの感じている世界を学生も感じようとする体験を通して、素材に対するとらえ方が広がった。この経験が授業を準備する際の指針となり、子どもたちにどんな部分を楽しんでほしいか、という授業目的を考えることにつながった。

(5)実践の時間

授業本番の日は、午前中に授業で使用する土台の制作、素材の準備(木材のバリ取りなど)を行い、午後の打ち合わせを行った。素材の準備の際には、前回の試作からある程度の形があり発想が生まれやすい形として、発泡スチロールのカキ氷カップをカットするなど細かな工夫も生まれた。授業は、13:35～15:15の時間で小学3、4年生4名の児童対象に授業を行った。

①　素材準備、環境構成について

授業では、さまざまな素材を使用する。素材を組み合わせる際には、両面テープを使うか、土台に素材を刺すなどの工夫をする。子どもたちが素材を選びやすいように、用途ごとにかごの中に入れて環境構成を行った。木材やカプセルなど素材に硬さがある立体物、紙や布など柔らかい素材を端に準備して、鈴やマカロニなど小さく細かい素材は、丸い紙皿に入れるなど、触れてわかりやすいように配置した。

表2:素材の一覧と分類

柔らかく可変性のある素材	わた、布、合皮、ふわふわのクッションカバー、フェルト、食器洗い用スポンジ、梱包材、お花紙、折り紙、スズランテープ、滑り止めシート、アルミホイル、巻段ボール、段ボール、シリコンシート
形状が変化しない素材	角材、紙管、木製丸棒、紙コップ、カキ氷カップ(加工あり、ナシ)、タピオカ用ストロー、ストロー、ガチャポン用カプセル
装飾用の小さな素材	ポンポン、マカロニ、タイル、カットした折り紙、石の形のアクリル
素材同士の組み合わせで活用できる素材	モール、カットした毛糸、麻紐、マスキングテープ、輪ゴム、
音のなる素材	鈴
自然素材	小さめの貝殻、松ぼっくり

②　授業が始まる前の「鑑賞」の時間

授業が始まる前に、児童のYさんとHさんが早めに教室に到着したため、学生たちのサンプル作品を鑑賞してもらった。子どもたちは「これは家で、扉があってハシゴもある!」と作品の細かい部分も丁寧に鑑賞し、楽しんでいた。その後、他2名の児童も教室に到着し、4名で学生の制作した『ゆめの国』を自由に鑑賞する時間になった。子どもたちから「これは何をイメージしたの?」と学生に対しての質問が飛び、学生が作品について説明する場面も見られた。最終的には参加する4名が全て鑑賞する時間となり、たくさんの手で触れて確かめる機会となっていた。作品よりも子どもたちの手が多くなっていたことから「手の国!」という印象的な言葉も生まれていた。

写真5:サンプルについて説明する学生。

写真6:鑑賞に熱が入り、子どもたちの手が密集し「手の国」となる。

学生の制作したサンプルをじっくり鑑賞することで、児童は新しい素材の扱い方を知る機会になった。また、鑑賞を通して学生とおしゃべりすることそのものがアイスブレイクの時間になっていた。

③　授業時間

【導入:土地選び、素材選び】

改めて学生の自己紹介を行い、本日の授業のタイトルやねらいを説明した。当日欠席の児童もいたため、児童1人につき、学生1、2名が一緒に制作を行う配置となった。

「『ゆめの国』を作るために『土地』を選ぶところからスタートします。」と子どもたちに伝えると「土地!」と大きく反応してくれた。授業タイトルやそこで扱う言葉を考えて準備したことが、世界観を作り出し子どもたちを授業に引き込む機能を果たした。「土地」選びは、こちらで想定していたよりもスムーズに決まり、教室の前方にある素材選びに移った。素材はバイキング形式で使用するものを自分のカゴに入れてもらった。

写真7:気になる素材をバイキング形式で集める。

【制作】

児童と学生のペアごとに、おしゃべりしながら制作を進めていった。

●児童Hさんのグループ

モールをクルクルに巻くことが楽しいことを発見したHさんは、たくさんクルクルを作って「土地」にさしていく。また、タピオカ用ストローを「どじょう」に見立てて穴が空いている場所を湖のようにして「どじょう」を育てるストーリーが生まれた。学生もHさんの発言を受け取り、会話しながらの制作で終始笑い声が絶えなかった。

写真8:クルクルに巻いたモールにはどじょうを呼ぶための鈴がついている。

●児童Sさんのグループ

Sさんは、ふわふわの素材が大好きでクッションカバーをメインの素材として制作を始めた。素材を大切そうに抱き抱えている姿が印象的だった。ウサギが大好きでこれまでにもウサギをモチーフにした作品を制作していたそうだ。スポンジやふわふわの素材を組み合わせて、ウサギの家を作ることを中心にして制作が進んでいった。

写真9:ウサギとウサギの住むお家。

●児童Yさんのグループ

はじめに「どんな土地かな?」と学生が問いかけると、「海があって宝石がある世界」とキラキラとしたイメージを伝えてくれた。学生のサンプルからの影響を受けて、家や木などを制作し、その後、キラキラの布を使ってお魚を作るなど素材を見立てて自分の世界を作り上げていった。

写真10:「宝石のある世界」からイメージして、お魚を作る素材もキラキラしたものを選んでいた。

●児童Iさんのグループ

Iさんは仕掛けを作ること、細かい丁寧な作業が好きなようだった。ガチャポン用カプセルの蓋を開けると、柔らかい質感の素材が入っていて楽しめるなど、考えて触れることができる形状が印象的だった。また、穴の空いた土台から「釣りをしているところ」を作ろうとして毛糸を垂らしていた。学生のサンプルに触れたことからイメージが膨らんだようにもみえた。

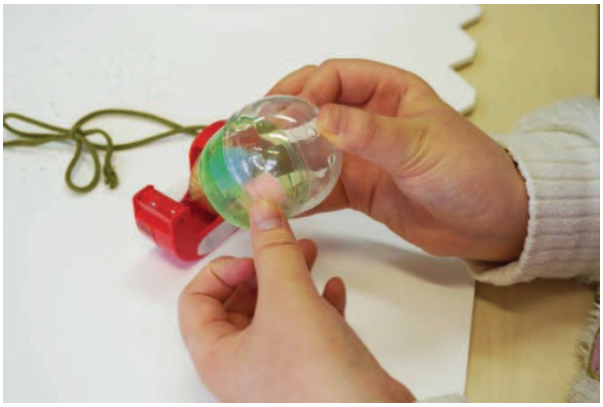

写真11:開けて楽しめる仕掛けを作る。

【鑑賞】

最後に作品を鑑賞する時間をとった。児童がタイトルや工夫したところを発表するのだが、鑑賞への熱意が凄まじく、作品の上に手が溢れかえるような状況になっていた。生徒たち同士で「これは何?」「へ～面白いね」という言葉が溢れてくる時間となった。それだけ、制作の時間に熱中したことが伝わってくる。

写真12:鑑賞の様子。

(6)　振り返りの時間

①　全体での振り返り

大学に戻り、コーディネーターのTさんを交えて振り返りを行った。学生から以下のような意見が出た。

【子どもたちへの気づき】

・鑑賞を楽しんでくれた。

・盲学校の子供達の持つ言葉の魅力がある。その言葉には、自分のやりたいことを他者に伝えるための的確な指示の言葉もある、また、「～さんに喜んでもらいたい」と言って場を盛り上げるための言葉など、たくさんの言葉がある。

・素材にイメージを持たせることでとてもロマンチックな世界が生まれていた。意味がある。

・発想に影響を受けた。子どもたちと一緒に作れた発想をリスペクト。

・どこまで学生がサポートするか→学生がやろうとすることを言葉で伝えること、そうすると子どもたちが自分の意思をしっかり伝えてくれる。

【授業内容への気づき】

・言葉を引き出すため、事前の準備(素材の準備、設定の準備)が大切。また、学生のサンプルから影響を受けた制作が見られた。きっかけとしてのサンプルの重要性。

・たくさんの素材に戸惑うかと思ったが、使いこなしていた。たくさんの素材があることの楽しさ。

・作品は作りたてのため接着部分が甘いところもある。制作してすぐに鑑賞になるため、倒れたり、壊れたりする場合がある。そこは課題。

上記のような話の後に、筆者から、山形盲学校のS先生も授業の準備について考える機会になりお互いに刺激を受けていること、また、子どもたちの制作の発想や作品が出来上がるまでのイメージの広がりを記録することの重要性について話をすることができた。

②個人の振り返り、学生の気づき

授業が終了してから、学生にformsを活用して一人ひとりの振り返りと一緒に制作した子どもたちの作品について紹介する内容を記述してもらった。学生のコメントを抜粋し考察を行う。

【障がいに対して、また、子どもたちに対しての捉え方の変化】

・子供達は常に頭の中で全体像をイメージしながら制作していたのかなとも思った。一緒に制作する前は、「視覚ではあまりわからないが、触ってみるとわかる触感重視の世界を作るのかな」と勝手に思っていたが、むしろ全く真逆だった。見えている人と一緒に作ることで、自分の作りたいものを、見えている世界側のよりリアルなものに近づけることができた。

・今回はWSの開催が盲学校ということで、私たちが盛り上げ役に徹さなければいけないと思い込んでしまっていた。そのため、本番も気を使い過ぎてしまって、つい敬語で話してしまったりすぐに「大丈夫?」というような心配の声をかけてしまったりと過保護になりすぎてしまうことがあった。しかし、実際の子供たちの様子からはなんの不安も感じさせない伸び伸びとした笑顔、なんにでも強い好奇心を持って取り組む積極性がビシビシ伝わってきた。むしろあんなに緊張していた自分が励まされてしまったくらいであった。（中略）今回のWSで、子供たちがしっかりと自分と向き合ってくれる姿に元気をもらい、人と関わるときに大切なことを改めて学ばせてもらった。目が見えないことは彼らにとってハンデではなく、より人生をいきいきと生きていくことにつながっているのかもしれないと考えさせられる経験だった。

・「目が見えないからできない」「～だからできないだろう」と自分の見解で相手の可能性を殺してしまうのはダメだと気づくことができた。また、Hさんの言葉での表現がすごく印象に残った。普段だったらあまり使わない言葉だったり、見えないからこそ言葉で伝えるということが当たり前であるため、なんで言ったらいいのか分からないが私の心の中に強く印象に残っている。

上記のコメントから、学生が子どもたちとの出会いによって「障がい」に対してこれまで持っていた捉え方を再定義している。さらに、イメージ、言葉の使い方など、学生自身が日常的に行なっている行為の異なる使い方があることを、子どもたちから学んでいることがわかる。

【学生自身の学び、変化について】

・WSがこんなにも楽しく、自分の意識の変化や成長に繋がるのかと、とても感動した。（中略）使う素材を選ぶ時やベースを作る時、相手のことを考えて作業することの大切さを学んだ。子供たちと接した時は、喜びや楽しさを一緒に共有することの大切さを学んだ。運営側がガチガチに緊張していたら子供たちも楽しくはなかったと思う。一緒になって楽しむことで楽しさの伝染が起こると思った。WSで美術と人間関係の豊かさを体験できることがとても素晴らしいことだと思う。それに私が実際に体験出来てとても嬉しかったし、達成感があった。自分でもできるんだと自信にも繋がった。

・一緒に制作することや、目が見える・見えない人の間に違いがあることは楽しいのだなと実感できたのは良かったが、適切なファシリをすることができなかったのが、今回のWSを通して気付いた一番の反省点であり、今後の課題だと思った。

さまざまな立場の方と意見を交えながら、企画から実践、そして振り返りまで実行したことで、学生はアートワークショップを通して人と人とのコミュニケーションを豊かにしていくことや、実践するプロセスそのものに多くの学びがあることなどの気づきを得ている。同時に、課題点も具体的に感じ取っている。全体での振り返りと個人の振り返りを二段階で行うことで、自分の実践について細かい部分まで振り返りを行うことができ、実践で得たことと課題の両方を俯瞰して捉えることにつながったと考える。さらに、子どもたちの制作した作品について説明をする回答の中には、「子どもたちの制作を体験していく中で、ロマンチックな作品だな、という印象を受けて、作品紹介の言葉は、絵本を読む時のような物語のようにした。」という学生のコメントがあった。これは、表現する子どもから影響を受けて、学生自らの表現を変化させたという出来事である。これは、ワークショップを開催する際に重要な「お互いに学び合う関係性を目指す」ことを体現した出来事であると言える。

授業終了後は、コーディネーターTさんからお誘いを受けて、学生は放課後等デイサービス「月のひかり」でボランティアを行うなど、継続的に活動を行うことにつながった。たった1度の出会いかもしれないが、表現を通して互いに刺激し合う様子が見て取れる。

3.まとめ

今回の協働事業を通して、学生が多くことを学んでいることが考察できた。障がいや子どもの捉え方そのものについて再定義がなされたこと、そして、子どもたちの表現に感化されて自分自身の表現を変容させたことだ。この2つは、アートを軸とした関わりから生まれたものであり、アートの持つ多様な力を学生自身が体感する機会となった。社会のさまざまな分野でアートを活用していく人材を育てるために、このようにさまざまな人々との出会いにより、学生自身が実感を持って学びを深めていくことが重要だ。教員として、段階的に準備をしていくことで出会いを充実させること、また、各自の気づきを言葉にする機会をこまめに作ることで学びを共有する機会を多く作ることが重要であることがわかった。本事業は、本学、「ら・ら・ら」、山形盲学校という3つの機関が連携し協議しながら実施することができた。それぞれの機関では誰に向けてどんなことを達成したいのか目標は異なるが、共通する到達点を模索する姿勢が、運営において必要なコミュニケーションを育んできたといえる。今後も、このような充実した実践の機会をつくっていきたい。

課題点として、学生、そして対象となった子どもたちが、双方向に影響を受けていることが感じられたが、今回は学生の学びを目的にしていたため、子どもたちが授業を通してどんな気づきを得たか調査する視点が不足していた。今後はその点を拡充させていきたい。さらに、今回のようにさまざまな分野でアートが入り込んで行く際に、どのようにその分野に入り込んで行くのかに着目したい。障がい者福祉の分野に限らずさまざまな分野でアートの力が発揮される機会を創出し、アートが社会にどのような影響を与えているのか、考察していきたい。

謝辞

このような機会をいただいた「やまがたアートサポートセンターら・ら・ら」の皆様、そして、授業を通して子どもたちとの出会いの場を設けていただいた山形県立山形盲学校の皆様、そして生徒の皆様にこの場を借りて感謝申し上げます。

参照WEBサイト

やまがたアートサポートセンターら・ら・ら
https://www.y-aisenkai.com/info/lalala/about
山形県立山形盲学校
http://www.yamagata-sb.ed.jp/htdocs/
障害者芸術文化普及支援事業(厚生労働省)
https://arts.mhlw.go.jp/

［参考文献］
伊藤亜紗（2020）『目の見えない人は世界をどうみているのか』光文社新書